

# 『千差人別』

「最後の晩餐」といえば、レオナルド・ダ・ヴィンチの作品が有名だが、数えきれないほどの画家が、この場面を描いている。

手法も作風も皆、千差万別。

インターネットの世界では、情報の価値は「千差人別」。



「最後の晩餐」 マールテン・ド・フォス

PSPED BITS

## 『ナンバープレートとオープンデータ』

カメラで自動的に読み取ったナンバープレートから、車の所有者の住所などを調べて販売促進に活用するビジネスが始まっているらしい。

ナンバープレートの自動読み取り技術が活用され始めたのは10年ほど前だろうか。羽田空港の駐車場の出口で一時停止すると、清算済みのチケットを挿入しなくても自動的にゲートが開くのに驚いた人は少なくないと思う。駐車場を予約する際にも、事前にナンバーを登録しておけば、現地で自動的に予約情報と照会されるため、チケットを持参したり予約番号を覚えておく必要がなく、とても便利だ。今では、ホテルやスーパーなどの駐車場でも採用されている。

このように、様々な場面で顧客に利便性を提供してきた自動読み取り技術だが、個人情報情報が照会されるとなると気持ち悪く感じるかもしれない。道路運送車両法は車の登録情報を公開情報としているので、車の所有者や使用者の情報は、本人の同意無く利用できる。商業登記や不動産登記と同じという訳だ。

そこで、あるパチンコ店が実証実験として、顧客がどこから来ているのか調べてみたそうだ。自検協の自動車検査登録情報提供サービスや全軽自協の軽自動車検査情報提供サービスを利用して、お店の駐車場に停めている車のナンバーから、車検証に記載されている車の所有者や使用者の情報を照会し入手する。こうして商圈を把握することで、広告チラシの配布エリアや誘導看板を効率的に設置することを目論んだとのこと。

自検協や全軽自協のホームページによると、情報の取得に必要な費用は1件あたり約12〜13円。費用対効果が見込めれば、今後は広くビジネスに活用されていく可能性がある。しかしその一方で、総務省の「パーソナルデータの利用・流通に関する研究会」では、スマートフォンでの位置情報を慎重に取り扱うべきとの議論がなされており、今後はナンバープレートの自動読み取り時にも何らかの告知や同意が求められるようになるのかもしれない。

そういえば、米国ではナンバープレートを車の後部にしか着けない州があるが、米国でもこの読み取りシステムは使えるのだろうか。



佐谷宣昭 Nobuaki Satani

1972年生まれ。九州大学工学部建築学科卒業。2000年九州大学大学院人間環境学専攻博士課程修了、博士(人間環境学)。翌月起業。株式会社パイブドビッツ社長CEO。明日の豊かな情報生活に貢献したいとの想いから、「情報資産の銀行」の必要性を説く。官公庁や都市銀行、小売業など10,096の事業者向け情報資産プラットフォーム「スパイラル(R)」を提供中。

株式会社パイブドビッツ  
東京都港区赤坂2丁目9番11号  
03-5575-6601(代表) <http://www.pi-pe.co.jp/>